
あめだま

椎名美月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あめだま

【Nコード】

N8530J

【作者名】

椎名美月

【あらすじ】

失恋したわたしの隣にいるこいつは甘いかおりがする。
いつもは優しくないのに、優しくなんかするから、わたしはなんだかおかしくなっちゃったみたい。

——なんて甘いのだろう。

はじめてあったとき、ぼんやりとした頭でそんなことを考えていたっけ。

鼻を掠める、お菓子のような甘い、甘い匂い。

「いつまでそうしてんだよ」

真横から声が突然聞こえてきて、あわてて顔を上げる。

ああ、そういえばこいつ、さっきからわたしの隣にいたんだった、なんて思う。

「もう、泣き止んだか？」

ぐずぐずになった顔を両手で隠して、とまらない涙を見られたくないともいうように顔を背ける。

ふとした瞬間に香るのは、はじめてあったときと同じ甘い、甘い匂い。

「……泣くなよ」

わたしの頭をなでるでもなく、手を握るでもなく。触れられていくわけではないのに、こいつの声は優しくわたしを包み込んでくれる。

泣くなよ、なんていわれたって泣きやめるはずもない。

ずっと、ずっと好きだった。三年間、馬鹿みたいにひたすら片思い。ようやく卒業式の今日、思い立って告白してみたら彼女いるからゴメン、だなんて。

わたしの三年間返せってんだ。
なんて、八つ当たり。わたしが勝手に想って盛り上がっていただけなのに。

「四月からお前、大学行くじゃん。またそこで楽しいことあるよ」

「……出会いもあるっていうの？」

「そりゃ……それなりに、あるだろうけれど……」

もともと、隣の男は言葉を濁す。
不審げに次の言葉を待っていると、頭をこつかれた。

「おい、泣き虫。たかが失恋くらいで何だ」

「たかがって何よ、たかがって！」

わたしにとってはたかが、じゃないのに。
ばか、雅人のばか。そういおうとしたけれど言葉が詰まる。
また、あの甘い匂いがした。
この甘い匂いは何なんだろう。何の匂いだろう。どこかで嗅いだことのある香り。

「零」

名前を呼ばれ、少しだけ顔を上げてみる。

「あめ、やるから泣くな」

わたしは子供か！っていいいなくなったけれど、素直に受け取る。

なんだか、変な感じだ。

けれどそれがこいつなりの不器用なやさしさなんだろうと思う。失恋して、いまわたしは少しおかしいから。普段思わないけれど、なんだかくすぐったくて、そんな不器用さがうれしいなんて柄にもないことを思ってしまう。

——この匂いだ。

あめの袋をあけ口に運ぶ。いつも香るこの匂いはこのあめだったのか。

「それ俺の好きなあめなんだよ。いいだろう」

どこか懐かしく感じていたのは、このあめは昔わたしが大好きでよく食べていたあめだった。

最近はまだ見かけなくなって口にすることはなかったけれど、雅人から香っていた香りはこれだったんだと納得。

「……うう……つつ」

涙腺崩壊だ。失恋して悲しくて、泣いて、泣いて。何がこんなに悲しいのか。何でこんなに涙が止まらないのだろう。

失恋してかなしくて泣いているはずなのに、なぜかこいつの優しさがあまりにもしみて、涙が出てくる。

「そんなに感動するなって」

「してないよ……」

こらえきれない嗚咽を漏らしながらできる限りぶっきらぼうに答

える。

「ねえ……」

「あ？」

「わたし、髪の毛切ったら似合うかな」

脳裏に思い浮かぶは、あの人の隣にいた女の子。

うすぼんやりとしか覚えていないけれど、髪の毛が短くて、だ
けどそんな髪型の似合う可愛い子。

もしもわたしが髪の毛を短くして、あの子と同じように素直に笑
うことができたなら。

もう一度だけチャンスがあるならば、振り向いてくれるのかな。
なんて。

素直にいけないから、ぶっきらぼうにしか聞けない。

「似合わないよ」

だけどこいつはそっけなくそれだけ答えた。

「似合わない。お前には、似合わない」

「わかったって……そんなに強調しないでよ」

またひとつ、涙が零れ落ちる。

ふさあ。暖かく大きな手がわたしの頭の上にかぶさった。

「お前は、そのままでいいんだ。長いままで、いいんだよ」

また鼻を掠めたのは甘いあめだまの香り。

しばらく涙は止まらなかったけれど。失恋の傷は完全には癒えなかったけれど。

なんとなく、その甘い香りが心地よくて。

少しだけ、少しだけ。わたしは素直な自分になれが気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8530j/>

あめだま

2010年10月18日06時00分発行